

和久傳ノ森から生まれる 食と人の未来

桑村 綾 株式会社紫野和久傳 会長

2007年、創業の地・京丹後に自社の食品工房を開設するとともに、食を提供する企業として、和久傳ノ森づくりが始まりました。工業団地の一角、更地から築いた森は今、青々とした木々が茂り、山椒の実、柿、柚子などを収穫できる豊かな森へと成長しています。

創業の地・京丹後での森づくり

京都の北、京丹後と言えば、皆さん口を揃えて、「どこか分からない、それは大原あたりのことですか？」とおっしゃるくらい、日本でもあまり周知されていない地の一つです。「和久傳」は、明治3（1870）年、丹後ちりめんの本場である京丹後の峰山町で創業した料理旅館です。一時は不夜城と呼ばれるほど、連日多くのお客様で賑わっていましたが、丹後ちりめんの産業がだんだんと芳しくなくなっていくにつれて、私どものお客様も減っていき、京都に出て料亭を開くことに致しました。その時、2千人もの地元の方々が料理旅館の存続を願って署名運動をしてくださって、「いつか必ず帰ってきます」と心に誓いました。

京都市内で「高台寺和久傳」を開業してからもずっと丹後への思いがありました。そして、「おもたせ」の紫野和久傳を始めて、新たな食品工房の建設が課題となった時、丹後に工房を作ろうと決めて、土地を求めました。

宮脇昭先生との出会い

いくつかご紹介いただいた土地の中から選んだのは、久美浜でした。500坪くらいの建物と設備で多くても1,000～2,000坪ほどで済むところ、そこは8,000坪もの工業用地。広すぎるとは思いましたが、隣接して工場が建てばその影響も受けるでしょうし、食品加工のにおいなどで周辺にご迷惑をおかけしてもいけません。そうしたことから、食を扱う企業として周辺の土地もまとめて購入し、工房の周囲を街路樹で囲むことを思いついたんです。ただ、街路樹は1本100万円くらいかかるものもあると聞いて、8,000坪の土地に植えるとなると……到底、



現在の和久傳ノ森。森の中に工房が点在している／「工房レストラン wakuden MORI」(写真左)、安藤忠雄氏建築「森の中の家 安野光雅館」(中央)、「久美浜第二工房」(右)

そのような資金はありません。意気消沈しているときに、たまたまNHKの番組で宮脇昭先生^{※1}の著書『木を植えよ!』が紹介されていて、すぐに横浜国立大学の宮脇先生をお訪ねしました。

世界中を飛び回られて不在がちな先生と幸運なことにすぐにお会いすることができて、「街路樹を植えようと思うんですが、お金がありません」と正直にお話をしましたら、「本気でやるなら協力します。1株350円から500円くらいで、1年後には1m伸びます」とおっしゃって、すぐをお願いを致しました。それが2006年8月のこと、その場で現地にお越しいただける日を決めて、11月には現地まで来ていただき、翌2007年5月3日には、第一回目の植樹祭を行うことができました。

想いの重なりが森をつくる

植樹祭に至るまでには、土壌の準備が必要でした。宮脇先生の「宮脇方式」と呼ばれる植栽方法は、潜在自然植生^{※2}を構成する樹種の苗木を混植・密植することで、成長の過程で木々に競争をさせて、淘汰された本当に強い木だけが残るという考えに基づきます。その考えに

※1 宮脇昭氏(1928-2021): 植物学者。横浜国立大学名誉教授、公益財団法人地球環境戦略研究機構国際生態学終身名誉センター長。日本の植生研究の第一人者。「ふるさとの木によるふるさとの森づくりー潜在自然植生による森林生態系の再生法ー」を提唱、実践する。世界及び日本各地で、この理論(「宮脇方式」と呼ばれる)に基づく防災・環境保全林などの植樹を進めた。

※2 潜在自然植生: 人間の影響を一切停止したとき、その立地に生じると判定される自然植生をいう(引用: 環境省 生物多様性センター HP <http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-020.html>)。ドイツのラインホルト・チュクセンによって提唱された植生概念の一つ。



写真1 植栽前の造成地(植樹祭前日)



写真3 2007年5月に行われた植樹祭の様子



写真2 故・宮脇昭氏

「和久傳ノ森」づくりにあたって多大なるご尽力をいただいた(第1回植樹祭り)



写真4 藁を敷いた土に植樹

何かインスピレーションのようなものを感じました。

植樹予定地を3m掘り下げ、ガレキを土台にして土をかけます。そこに植樹を行うことで、ほわっとした土の中に根が地中深く入り、さらにガレキを抱き込んで強い土壌を作る。東日本大震災の「ガレキのマウンド」と同じです。それが防災林として大きな役割を果たしてくれる、昔ながらの「鎮守の森」をつくるという取組です。

そうしてできた森の土台(写真1)に、全国から総勢1,600人ものボランティアの方々が集まって植樹をしてください、1日で予定の数・1万8,000本を植えることができました(写真2～3)。

また、そのボランティアの方々に植えていただくために、従業員たちが一丸となってリーダーシップをとり、各ブロックに分かれてそれぞれ植樹の説明を行った経験は、10年も20年もかかってやるべき社員教育が一度でできたような、生きた教育になりました。

料理旅館から工房へと形は変わりましたが、久美浜工房の開設と和久傳ノ森づくりによって、ようやく故郷との約束が果たせたように思います。

「2本植えれば『林』、3本植えれば『森』、5本植えれば『森林』になる」という宮脇先生のお言葉に背中を押していただき、一個人でも木を植えることから始められると教えていただきました。和久傳ノ森づくりは、地球環境のためなどという大層な気負いではなくて、皆様の思いが重なって形となったものだと思っております。

年々、育っていく森を見ていると新しく見えてくるものがたくさんあります。「木を植えることは心にも木を植えることだ」という宮脇先生のお言葉通り、1本、2本と植えていくうちに、心に木を植えたように爽やかな気持ちになっていくことを実感致しました(写真5～7)。

植樹祭に参加してくださった方々や、森を訪れてくださるたくさんの皆様の心の中の木が育ち、この森と食を通じて、少しでも豊かな心の未来を築いてくださることを願っております。

● 桑村 綾(くわむら あや)

1940年京都府宮津市生まれ。1964年、丹後の老舗料理旅館「和久傳」に嫁ぎ、1982年に京都「高台寺和久傳」を開業。2008年、京丹後市久美浜町にて食品工房を開設し、周辺の植樹を行って「和久傳ノ森」を拓く。



写真5 植樹から5年経過し、成長した和久傳ノ森(2011年頃) 驚くべきほどの早さで樹木が成長し、予定よりもずっと早く森を形成した(建物は工房レストラン wakuden MORI)



写真6 和久傳ノ森の内部(2023年)



写真7 和久傳ノ森の外周(2023年)

表1 和久傳ノ森 沿革

2007年5月3日	第1回「植樹祭」開催 全国から参加のボランティアの方々と1万8,000本を植樹
2007年9月5・6日	従業員による植樹祭を開催 2,000本を植樹
2008年1月	久美浜第一工房竣工
2012年5月2日	和久傳ノ森5周年植樹祭を開催
2014年3月28日	第3回植樹祭を開催
2015年2月16日	久美浜第二工房竣工
2017年6月23日	森の中の家 安野光雅館開館、工房レストラン wakuden MORI 開店